

第39回電気通信普及財団賞

テレコム人文学・社会科学部門 総評

第39回テレコム人文学・社会科学賞、テレコム人文学・社会科学学生賞に多数のご応募をいただき有難うございました。今回の応募件数は前回と比べてやや少なく、テレコム人文学・社会科学賞に23件（前回28件）、そのうち4件が英文論文でした。また同学生賞への応募は5件（前回9件）で、そのうち1件が英文論文でした。学部学生の作品が2件、大学院博士課程前期の学生1件、博士課程後期の作品が2件でした。各種学会への働きかけ、プレスリリース等、応募の勧奨を行っていますが、残念なことに応募作品はここ数年、減少傾向が見られます。

■テレコム人文学・社会科学賞

今回テレコム人文学・社会科学賞の23件のうち、学会誌、雑誌等に掲載された論文の応募は4件で、19件は読みごたえのある書籍でした。今回の応募作品を分野別にみると、研究分野は社会学の分野が最も多く、経営、法律、政策など多岐にわたっています。また研究の対象を見ても、マスメディア、プラットフォーム、ネット社会と政治の話など情報通信・電気通信にかかわるさまざまな問題が取り上げられています。応募作品の中には明確かつ鋭い分析を示す作品もありましたが、質と量の両面の総合評価の結果として、それらの多くは最終選考の対象には至りませんでした。しかし、著書としての従来研究が少なかった分野を研究対象とした作品や、学術論文とは言えないものの意欲的な作品や、学説書ではないが、情報通信の歴史を記した貴重な業績ではあるが、受賞には至らなかった労作もありました。

テレコム人文学・社会科学賞の選定にあたっては、予備審査を経た約4割の作品について厳正な最終選考を行いました。その結果、入賞3件、奨励賞1件を決定しました。ここ数年に比べて入賞作品が3件と多くなりました。すべて書籍で、いずれも意欲的な作品で、多くの審査員から高く評価されました。

入賞した3件のうち、横山智哉氏の『政治の話とデモクラシー：規範的効果の実証分析』は、日常生活で市民が自然にかわす会話の中に、政治参加を促進する可能性があること、また政治的会話の測定方法の改善や政治的会話が政治参加や政治的寛容性に与える影響のメカニズムを解明したことで、非常に優れた業績で高く評価できます。その成果は主権者教育ひいては民主主義のあり方に関して一つの方向性を示すものです。ただ、情報通信そのものではない点が審査員の評価が分かれるところでした。

齋藤邦史氏の『プライバシーと氏名・肖像の法的保護』は、電気通信ネットワークやビッグデータによって、近年、個人情報保護の問題を扱う作品が増えてきていますが、その中で本作品

は「プライバシー」の理解について先行研究を踏まえつつ、現代的課題を法学的に整理し、分析した有益な文献です。

佐々木裕一他2名の『スマホでYouTubeにはまるを科学するーアーキテクチャと動画ジャンルの影響力』は分析のレベルと視点の広さ、また定量分析も丁寧に行われており、高く評価されました。

奨励賞の大森翔子氏の『メディア変革期の政治コミュニケーション：ネット時代は何を変えるのか』に関しては、内容的には高く評価される作品ですが、著者は若手研究者であり、今後さらなる研究を積み重ねていただきたいという期待を込めて、奨励賞としました。

■テレコム人文学・社会科学学生賞

テレコム人文学・社会科学学生賞は、予備審査を経た作品について厳正な最終選考の結果、1件を入賞、1件を奨励賞としました。今回、学部学生による卒業研究の成果に基づいた応募作品「Information and communication technology use by students with disabilities in higher education during the COVID-19 pandemic」は極めて優れた作品で、社会的な意義も大きい作品です。

奨励書の渡邊祐作氏「地上波テレビ放送局の番組編成差別化と広告価格に関する実証分析」は地上波テレビ番組編成と広告価格に関する論文で、データ上の制約があるなかで実証分析を試みた努力は評価に値します。日本の民放とアメリカ地上波では状況異なるなどの問題点を念頭に、今後一層の研究を望みます。

受賞された方々の今後、一層の研鑽を期待しています。また大学院生だけではなく、学部学生による情報通信に関わるさまざまな分野についての新規性、論理性などの面で優れた作品の積極的な応募が待たれます。

最後に、今回は残念ながら、テレコム人文学・社会科学賞・同学生賞ともに経済分野の応募作品が1件しかありませんでした。情報通信産業を取り巻く環境は大きく変化しています。一例として、通信NWの仮想化の進展と今後の通信政策の在り方やNTT法の見直しによる業界再編、公正競争の確保など政策、制度論などに関する経済学の視点からの理論分析、実証分析の応募をお待ちしています。

■テレコム人文学・社会科学賞

◆発表形態（カッコ内は昨年度. 以下、同）

著書	学会誌、雑誌等
19 (18)	4 (10)
82.6% (64.3%)	17.4% (35.7%)

◆著者の所属

大学	メーカー (研究所含む)	一般企業	その他
18 (22)	1 (1)	1 (1)	3 (3)
78.3% (78.6%)	4.3% (3.6%)	4.3% (3.6%)	13% (10.7%)

◆言語

和文	英文
19 (24)	4 (4)
82.6% (85.7%)	17.4% (14.3%)

◆分野

社会	経済	経営	政策	法律
12 (15)	1 (0)	4 (6)	2 (3)	4 (4)
52.2% (53.6%)	4.3% (0)	17.4% (21.4%)	8.7% (10.7%)	17.4% (14.3%)

■テレコム人文学・社会科学学生賞

◆発表形態 (カッコ内は昨年度. 以下、同)

学会誌、雑誌等	書き下ろし (学位論文を含む)
4 (6)	1 (3)
80% (66.7%)	20% (33.3%)

◆著者の所属

学部学生	大学院生(博士課程)
2 (1)	3 (7)
40% (11.1%)	60% (77.8%)

◆分野

社会	経営
2 (5)	3 (2)
40% (55.6%)	60% (22.2%)